

Mon

見る

Tue

知る

Wed

ひと

Thu

歴史

Fri

文化&スポーツ

## アートの力で病院に潤いを

### 次代の創造手

NPO法人アーツプロジェクト理事長

もりぐち  
森口 ゆたかさん (54)

潤いに欠けがちな病院生活にアートを取り入れ、患者に安らぎをもたらす「ホスピタルアート」が注目されている。全国でも先駆けとなったのがNPO法人アーツプロジェクト(大阪府豊中市)だ。立ち上げたのは大阪を拠点に活動する美術家の森口ゆたか。これまでに約30の医療機関で手掛けてきた。

◎ ◎  
近畿大学医学部付属病院(大阪府大阪狭山市)のロビーに貼られた大きな木の切り絵。周りの柱も木の葉や鳥の絵で飾られている。昨年、同大学文芸学部の学生が制作した。

「エレベーターで丁寧にあいさつしてくれてありがたい」。声魂(こだま)の樹(き)と呼ばれる絵には患者の声や要望が貼られている。面と向かっては言いにくい辛辣な意見もある。それらに対し病院側は絵を通して、対応を丁寧に説明する。アートが患者と病院のコミュニケーションを媒介しているのだ。以前から患者の声を聞くアンケートボックスを設置

## 「制作の過程と納入後も重要」

## 医師・患者のつながり生む

### 人生いろいろ

1960年	大阪市に生まれる	15才で米オレゴン州に1年間ホームステイ
84	大阪芸大卒	関西を中心に作家活動
98~99	夫の留学に伴い英国へ	ホスピタルアートに出会う
2002	アーツプロジェクトを立ち上げ	作家生活と団体理事長の二足のわらじ
04	NPO法人化	
11	徳島県立近代美術館で個展を開く	

していたが、なかなか利用してもらえなかった。病院から相談を受けた森口は学生に病院との徹底的な議論を促した。

「たぐさんの意見が見える作品でなければ」「患者の声が病院という大樹を育む滴というコンセプトで」。長いやりとりを経て作品が出来上がる。今では多くの患者が絵の前で足を止める。

アーツプロジェクトは約25人のスタッフで運営す

ぼく  
ぼーん

### フラダンスの精神に共感

7年ほど前からフラダンスを始めました。最初は年を取ってから続けられそうだからという理由でしたが、今ではその精神にとっても共感しています。アロハスピリットと呼ばれており、優しさ、調和、寛大さ、謙虚さ、忍耐強さの5つがあるそうです。

ハワイの人々が大切にしている精神性。それは何もフラダンスを踊っているときだけでなく、日々の行いやたたずまいについて説いているのだと思います。

私にとってアートはパンや水と同じくらい欠かせず、日常生活の中から生まれてくるもの。歴史の中で脈々と培われてきたフラダンスの精神とアートは根底でつながっているのではないのでしょうか。

病院から相談を受けアーティストを仲介。絵画や彫刻から音楽、ダンス、演劇まで提供する。大切なのはただ美しい絵や彫刻を持ち込むことではない。「作品を納める過程と、納めた後もきっちり面倒を見ていくことが重要」と森口は力を込める。

◎ ◎  
森口自身が映像やインスタレーションを創る美術家だ。転機は1998年。企

業の研究者である夫の留学に付き添い、英マンチェスターに2年間滞在した。地元で「健康のためのアート」という講座を興味本位で受講。30カ国近くが集まるホスピタルアートの世界大会にもコーディネーターとして関わった。

◎ ◎  
ロンドンの病院では快適な環境づくりのためアートの専門部署がある。学芸員が病院に常動していた。海外の常識に触れて衝撃を受け、「日本でも広めない」と

この使命感が芽生えた。帰国後、2002年にアーツプロジェクトを立ち上げる。手探りだったが、アートが本来持っている力を信じた。「古くからの村祭りや儀式には、人々を巻き込む役割がある」。その力は作り手にも及ぶと気付く。04年、京都造形芸術大学(京都市)の学生と、大阪府和泉市の産婦人科病院の壁画を制作した。新生児室の前で壁画を描いていた一人の学生がある日、「大学で勉強するより絵を描く根本的な意味が分かった」と打ち明けた。

◎ ◎  
近大では来年度新設する学科でホスピタルアートが日本で初めて実践だけでなく体系的な授業として導入される。森口も教壇に立つ予定だ。

◎ ◎  
医師は患者を測定数値で診てしまいがち。しかし「相手が何を考え、何を感じているか。アートを通じて数字ではなく人間として向き合うようになるのでは」と森口は説く。敬称略(大阪・文化担当 安芸悟)



近畿大学医学部付属病院と議論して「声魂の樹」を作り上げた森口さん(大阪府大阪狭山市)